

1. 色彩は心理的、生理的に及ぼす影響の大きいことはすでに衆知のことである。色をただ単に個人的好みによって用いるのではなく、建物、設備その他色自身がもっている心理的、生理的、物理的な性質を利用して、人間の生活および作業の雰囲気、環境の快適、作業能率など色彩調節による影響は重要な問題である。今回は視作業と環境色による実験を行なったので報告する。

2. 実験室内の環境色を 0.3R8.1/3.1, 7.5GY8/4, 9.6/, 5.5G7.6/1.0, 2.6/ の5色とし、各色相ごとに天井、壁、床、机一面を色彩調節する。光源は白色けい光灯、白熱電球を用い、実験室内の照度は 500LX一定とする。作業はレース編による疲労測定を行なう。作業前後にはフリッカー値、眼精疲労計により測定する。

3. 1) 10分間各色相を凝視した場合、白色けい光灯では 0.3R8.1/3.1, 5.5G7.6/1.0, 7.5GY8/4, 9.6/, 2.6/ の順に機能低下。

2) 1時間視作業後では 5.5G7.6/1.0, 9.6/, 0.3R8.1/, 3.1, 7.5GY8/4, 2.6/ の順に機能低下。

3) 白熱電球の場合、10分間凝視した場合 7.5GY8/4, 9.6/, 5.5G7.6/1.0, 0.3R8.1/3.1, 2.6/ の順に機能低下。

4) 1時間視作業後では 9.6/, 5.5G7.6/1.0, 2.6/, 7.5GY8/4, 0.3R8.1/3.1 の順に機能低下。